

文章題テスト・小説(3)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その翌日は、朝のうちはまだ雲間から薄日が洩れていて、ぼくがゴム長をはき、傘を持って分教場へいくと、先に教室へはいつていた連中が、みんな窓から首を出して、声をそろえてぼくをはやし立てた。

「東京者は、臆病者！ 天気がいいのに傘さして！」

ぼくは、珍しくむっとした。なにか、みんなの前で失敗をしたり、みんなが容易にできることをできなかったりして、それではやし立てられるのなら仕方がないが、そうではなくて、傘をただ手に持っているだけなのに、さしているといったり、用意がいいのを臆病と取り違えたりする連中には、黙っているわけにはいかない。

そこで、ぼくはみんなの前に両手を上げて、こう叫んだ。

「ちよっと静かにしてくれよ、みんな」

みんなは、ぴたりと口をつぐんだ。ぼくがそんな演説めたことはいちどもしたことがなかったから、みんなはびっくりしたのだ。ぼくはつづけて、こう叫んだ。

「きみたちはいま、ぼくのことを臆病者といったね。だけど、ぼくは雨がこわいんじゃない、濡れたくないから、傘を持ってきたんだ。なるほどいまは降ってないけど、午後からきつと雨になるよ。ぼくにはちゃんとわかってるんだ。なんなら、雨が降り出す時間をいおうか？ それはね、午後の三時ごろだ」

みんなは、ぽかんとしてぼくを眺めていた。裏山でホトトギスが鳴いていて、その声が非常にはっきりときこえていた。ぼくは、この村にきてから、こんなに自信にミちた口調でだれかにものを語ったことが、いちどもあつただらうか。

ぼくはちよっと調子に乗り過ぎたんじゃないかと思ったが、自分の舌の動きを止めることができなかった。われながら、偉そうな演説になってしまった。

ところが、間の悪いことに、ぼくが話し終わったとたん、それを待っていたかのように雲間から明るい陽射しが、かっどぼくらの頭上にテリつけてきた。校舎の窓という窓が、



いっせいにきらきらと輝き、校庭にぽつんと一人立っている。ぼくの影が校門の方へ逃げるように走り、みんなは急に勢いづいて、わあわあとぼくに非難の言葉を浴びせてきた。

そんな、猫が忍びこんだ鶏小屋のような騒ぎのなかから、ぴよんと校庭に跳び降りてきた者があった。中学三年の大作である。大作は、分教場では一番の大男で、鼻の下にはもうっすらとひげが生えている。中学とは教室が違うから、授業中のことはわからないが、校外活動では常にリーダーとして睨みを利かせている人物である。その大作が、ふいに窓から跳び降りてきたものだから、一瞬、ぼくは胸がどきりとした。いつかテレビで見た西部劇の決闘シーンが、ちらと頭をかすめたからだ。

「静まれ！静まれっていうに！」

大作は、腹のソコまで響くような大声で窓の騒ぎを鎮めると、みんなに向かって、

「面白いじゃないか。どうじゃろう、きょう午後の三時に、雨が降るか降らないか、このモヤシのユタと賭けをしてみんかのう」

といった。どっと賛成の声があがった。大作は、ぼくのすぐ前まで歩いてきて、見下ろした。「どうじゃ、モヤシ。みんなもああいうてるが、賭けをしてもええな？」

ぼくは内心、困ったことになったと思ったが、いまさらあとへも退けないから、

「ああ、いいとも」

と、せいぜい胸を張って答えた。

(三浦哲郎「ユタとふしぎな仲間たち」による)

(注) 分教場…本校とは別の所にした学校、分校

線ア～オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア

イ

ウ

エ

オ



